

# 人を選び好みすることとしての〈愛〉

——その決疑論的性質を考慮した研究のために——

東京大学

森山至貴

本報告は、人が恋人、結婚相手、セックスフレンドなどと関係を取り結ぶことを、人を選ぶことという共通点に依拠した形で包括的に記述するための理論的基盤を整備する作業を行うものである。この目的のために、本報告では先に挙げたような事象を〈愛〉と呼び、その最広義の意味で用いることとする。

人を選ぶ実践のうち、〈愛〉に特有な事態とは、その選択が「理由がない」「正当性がない」状態で行われうるとされていることである。しかし、私たちは「惹かれて」しまったのだから仕方がないのだ、と言いたい気分を持つと同時に、自分や他人が打算で恋愛相手などを選んでいても往々にして感じる。この事態をどのように捉えればいいのかのだろうか。

例えば、〈愛〉は私の「感情」であり理性的な選択ではない、というナイーブな議論は感情社会学の知見によって否定されている。しかし、真に問われるべきは、それを感情と呼びたい私たちの心性、他ならぬこの私の感情の固有性や説明不可能性を盾に取り、感情を持ち出さなくなってしまう心性そのものであり、「感情」という考え方がいかなる意味で必要とされているかである。

この点に関してもっとも的確に分析を行ったのが Luhmann の『情熱としての愛』である。Luhmann は、愛が感情であることそのものがその選択の理由や正当性を不要とするゆえに逆説的に愛に理由や正当性をもたらす、という逆転について記述する。さらに Luhmann は、この逆転のあやしさそのものが〈愛〉を存続させる、と主張する。愛としか明示しえないものに否応なく捕われている「私」の愛からの逃れ難さは、にもかかわらず自分の要求を満たすため対象に手練手管を用いて働きかけたりするこの「私」の営みと矛盾を引き起こしている。Luhmann によれば、むしろこのパラドックスを駆動因とし、愛は快楽や理性、友愛などを対立項として持ち出しながら、「シンボルによって一般化されたコミュニケーション・メディア」としての存在を確実にしていくのである。愛がどのようなものであるかに関するおびただしい説明は、パラドックスを一時的に解決し、延命させるための手段でしかない。このことを Luhmann は「愛の決疑論」と呼ぶ。したがって、〈愛〉が持ち出される時には必ず、「愛だから愛なのだ」では済まない部分（パラドックス）を決疑論的に「解決」するためのメカニズムもが随伴している。

続いて、「惹かれて」しまったのだから仕方がないという「解決」方法の背後にある、〈愛〉のあやうさをその都度決疑論的に封じ込めようとする機構に関して、既存の〈愛〉に関する諸研究を検討し、整理することによって、そのパターンを画定する。抽象度を極端に上げて整理すると、我々の〈愛〉の決疑論的処理機構とは①関係性の質の種類、②関係性を取り結ぶ人の種類、③関係性が取り結ばれる場の種類、にしたがって〈愛〉とそれ以外のものの間に線を引く形を取っている。これらの3つのパターンは時に錯綜するが、この錯綜が一元的な機構に回収されえないことこそ〈愛〉の（終わることのない）決疑論的性質を指し示しているものであり、したがってこれらの3つのパターンの間を横滑りしながら〈愛〉の決疑論的性質が「解決」されていくさまを観察することが必要である。具体的な研究が今後具体的にはなされるべきだろう。